

## 米国における HIV/AIDS に関する行動科学的研究

仲尾 唯 治\*

### An Overview of Behavioral Scientific Studies on HIV/AIDS in the United States

Tadaharu Nakao · Associate Professor of Sociology  
at Yamanashi Gakuin University  
Dept. of General Education

#### はじめに

筆者は1987年に約半年間の、また1989年に約1月半の在米研究の機会を得た。本稿はこの2回の折に行った「米国における HIV/AIDS に関する行動科学的研究」の一部である。

1987年10月、HIV/AIDS に関する記事がない日はないニューヨークタイムズ紙ナショナルエディション版に次のような記事が掲載された。「HIV に関する臨床・行動研究センター (Human Immunodeficiency Virus Center for Clinical and Behavioral Studies, 以下 HIV センターと略す) がニューヨーク市に設立された。このセンターは、連邦政府による6年間の暫定措置で設立され、延べ1,900万ドルの予算措置が講じられる。設立の目的は、HIV/AIDS に関する心理社会的な側面や精神医学的側面の研究にあり、免疫力へのストレスや抑うつの影響を明らかにすることである。たとえば、サンフランシスコの AIDS 患者は

---

\* 山梨学院大学一般教育部助教授・社会学

他の地域より延命率が高いのはなぜであるか。女性の AIDS 患者はなぜ延命率が低いのか。それはジェンダーの側面が関与しているためであろうか。あるいは、別の要素が関与しているためであろうか。といったような実際的な問題を、研究するためである。」

同年12月にニューヨーク市を訪問する機会を得たため、HIV センターの顧問の1人とわかった、旧知の D. J. Rothman コロンビア大学医学部教授を通して同センターへの訪問の可能性を打診した。しかしながら、その時点ではマスコミ報道が先行し、実態はまだ整っておらず、研究室もまだ定まっていないとのことであったため、訪問は断念せざるをえなかった。

1989年8月、再度当地を訪問する機会を得たため、今回は同教授から紹介を受けていた HIV センターのシニアアドバイザーを務める、R. Bayer コロンビア大学公衆衛生学部助教授を通して再度訪問を打診し、実現となった。

この HIV センターは、ニューヨーク市西168丁目のコロンビア大学公衆衛生学部のキャンパス内にあり、その一角のニューヨーク州立精神医学研究所に間借するようなかたちで設置されていた。このように、このセンターも米国における他の研究機関同様、官民共同で運営されている。具体的には、HIV センターの場合、先のニューヨーク州立精神医学研究所のほか、精神衛生研究財団、コロンビア大学公衆衛生学部、コロンビア大学保健科学部、プリスパイタリアン（キリスト教長老派）病院、セント・ルークス/ルーズベルト病院センター、ハーレム病院の共同機関となっており、NIMH、国立アルコール・薬物濫用研究所、厚生省等の連邦政府機関の財政援助のもとに活動している。設立は1987年9月で、100名を超えるスタッフが上記の共同機関から招聘されているとのことである。

また、同年8月、HIV センターへの訪問を終えた筆者は、G. C. Stone カリフォルニア大学サンフランシスコ校社会科学・行動科学研究所教授（現在は退職）の紹介で AIDS 予防研究センター（The Center for AIDS Prevention Studies, 以下 CAPS と略す）を数回にわたって訪問した。目的は、HIV センター同様、アメリカにおける HIV/AIDS に関する行動科学的研究動向を調べる

ためである。

連邦政府の5年間の暫定措置で設置されているCAPSは、ニューモンゴメリ通りの雑居ビルの6階にあり、設立は1986年である。HIVセンターの場合と同様、官民共同で運営されており、カリフォルニア大学サンフランシスコ校、サンフランシスコ市公衆衛生局、ベイビューーハンターズ・ポイント財団の共同機関となっている。また、NIMH、国立アルコール・薬物濫用研究所、厚生省等の連邦政府機関の財政援助のもとに活動している点もHIVセンターと同様である。なお、同様のHIV/AIDSに関する行動科学的研究を行っている研究機関は、アメリカ国内にあと3つあると聞かすが、互いの連携はないらしく、不思議なことに今回訪問した2つの研究機関のどのスタッフに尋ねても、それについての明確な情報は引き出せなかった。

## I HIVセンターにおける行動科学的研究

筆者は、上記のR. Bayer助教授の紹介で、プリスパイタリアン病院の臨床心理学者であり、HIVセンターの静脈注射薬物濫用者コーホート調査部門のクリニカルディレクターを兼ねるA. Carballo-Dieguez博士と面会することができた。改めて、博士にHIVセンターの設立目的に関する説明を求めた。博士によると、それはまず、HIVに関連する疾患の治療法と予防法の確立にあり、特に、①HIVに関連するdementia (HIV/AIDS関連痴呆症)や抑うつ症、不安といった精神症状、②免疫状態、③心理社会的状態、の3者間の関連の解明にあるという。そしてそれは、人間の行動に影響を与える因子を理解することに基いてなされるとのことである。具体的には、次のようなものがアジェンダとして掲げられている。

- ・脳障害を引き起こす感染状態の特定
- ・感染者の精神疾患の発生率とそのタイプの解明
- ・抑うつ状態ならびに心理社会的ストレスの免疫機能への影響
- ・健康障害行動と健康増進行動双方の発症への影響

- ・性的に危険な行動をとる者へのカウンセリング，ならびに子をもつ静脈注射薬物濫用者へのカウンセリングがもたらす疾患状態への影響
- ・神経障害の性機能への影響
- ・HIV 感染の性的機能障害への影響

また、HIV センターの研究上の核は次の6つについてのアセスメントであり、これに関連する精神医学的情報、心理社会的情報、サイコセクシャルな情報、神経学的情報、その他の医学的情報、免疫学的情報の各種情報の収集に基づき、それぞれの研究が5つのプロジェクトに分かれてなされているという。

③精神医学的／心理社会的側面におけるアセスメント、⑥サイコセクシャルな側面におけるアセスメント、⑦神経学的／神経心理学的側面におけるアセスメント、⑧医学的診断／実験／治療の各側面におけるアセスメント、⑨地域の保健教育と予防の側面におけるアセスメント、⑩基礎科学分野におけるアセスメント、の6つである。

また、5つのプロジェクトの対象はそれぞれ、①女性と子供、②青年-1：通学者、③青年-2：ドロップアウトした者とゲイ（男性同性愛者）の若者、④青年-3：性犯罪者、⑤ HIV 感染のナチュラルヒストリーならびにその経過、である。

以上のなかで行動科学的に、あるいは psychoneuroimmunological な観点から筆者が目にしたのは、上記「⑤ HIV 感染のナチュラルヒストリーならびにその経過」プロジェクトとしてのコーホート（フォローアップ）調査である。

このコーホートの調査対象者は、上記の共同機関のうち、医療機関に通院・入院する者から選ばれ、症状を異にする HIV 抗体陽性者・同抗体陰性者の双方から構成される450名である。そして全調査対象者のうち、1/3はゲイであるか両性愛者である男性が選ばれるといい、また残りの2/3は子をもつ成人の静脈注射薬物濫用者の男女が選ばれるという。これら調査対象者は、半年に1度の割合で面接・検査を受け、ゲイであるか両性愛者である男性の場合は1回につき7～8時間、子をもつ成人の静脈注射薬物濫用者の場合は5時間、この調査のために拘束される義務を負うという。そして調査対象者による、上記の精

神医学的情報、心理社会的情報、サイコセクシャルな情報、神経学的情報、免疫学的情報、の各種情報の提供を通じた長期的な観察により、HIV感染の様々な段階に関連する因子を特定しようとするものである。

なお、調査対象者に対する謝金は生活程度を考慮してか、ゲイであるか両性愛者である男性のほうがかかなり高く時給80ドル、子をもつ成人の静脈注射薬物濫用者は時給10ドルとのことである。また、筆者の訪問時点では、すでにゲイであるか両性愛者である男性が210名、子をもつ成人の静脈注射薬物濫用者が男女合計200名集まっていたが、静脈注射薬物濫用者がもう少しほしいとのことであった。

## II CAPS における行動科学的研究

筆者は、上記の G.C. Stone 教授の紹介で、カリフォルニア大学サンフランシスコ校医学部助教授であり、CAPS の副所長を兼ねる T. J. Coates 博士と面会することができた。

博士に CAPS の設立目的に関する説明を求めた。博士によると、それはまず、HIV 疾患の予防に関する多角的な研究の促進であるとのことである。そのために、CAPS は次の 6 つの研究環境を作っていくことを具体的な目的としているとのことであった。

①アカデミックな研究者、公衆衛生の専門家、地域の科学者の 3 者間の協同の促進、② HIV 疾患の発生ならびに予防に関する疫学的・行動的研究の促進、③高度で有意義な共同研究の保障、④新たに AIDS 予防に関する研究を開始する科学者へのトレーニングのためのフォーラムの提供、⑤知識や技術の共有化の促進、ならびに効果的な研究モデルと効果的な予防モデルの共有化の促進、⑥ HIV の流行に関連する地域、州、国家の 3 者間の保健政策の定式化の促進。

CAPS の核になっている研究部門は、①疫学と生物統計学、②調査研究、③行動科学、④生物医学的科学と基礎科学、⑤倫理的問題の分析、⑥保健政策分析、の 6 つであり、現在このもとで 20 以上の研究がなされており、また 30 のパ

イロットスタディが進行しているという。

CAPSにおける行動科学的な研究は、主としてカリフォルニア大学サンフランシスコ校から出向しているスタッフによってなされている。そのなかで筆者が注目したものに、次のようなコーホート調査研究がある。

(1) HIV 抗体検査に対する心理的ならびに行動的反応に関する研究。

(2) 歯科医に対する知識・態度・行動面での教育的・予防的プログラムの開発に関する研究。

(3) ストレスマネジメントが男性の HIV 感染者に対して果たす、ハイリスク行動の軽減と免疫機能の改善の面での効果に関する研究。

(4) ハイリスクな状態にありながらも、集中カウンセリングやソーシャルサポート、抗体検査などがゆき届かない状況にある男性静脈注射薬物濫用者とその女性の性的パートナーに対して、臨床に基礎を置きながら、これらの試みを体験させる介入的研究。

(5) 性的に活発な14歳から20歳までの女性約1,450名を対象とした、HIV 感染の危険性を減らすための情緒的・教育的プログラムの開発に関する研究。

(6) HIV 感染とそれに伴う症状の経過に関連する心理社会的因子に関する研究。

(7) サンフランシスコにおけるハイリスクな住民に対する黒人、ラテン系、白人の人種別・性別にみた HIV 感染のリスクファクターに関する研究。

(8) 中央アフリカの都市部における女性の HIV 感染とハイリスク行動の研究。

(9) HIV の抗体陽性者でありながら、なんら症状を呈しない人 (asymptomatic carriers) に対する初期介入によってもたらされた、社会的・経済的結果に関する研究。

(10) ゲイならびに両性愛の者が抗体検査によって受ける影響と、彼らのハイリスク行動についての知識に関する研究。

### III 結びにかえて

アメリカが世界で最も多くの HIV 感染者を抱える国であることを反映してか、以上のように、HIV/AIDS に関しても行動科学的な研究がかなり積極的に行われている。この HIV/AIDS に関する行動科学的研究の隆盛には、次のことが大きく関与しているように思われる。

それは、現在のところ HIV/AIDS の治療法は確立しておらず、対症療法に頼らざるをえないということである。また、ストレスマネジメントをはじめとして、心理社会的あるいは行動的な条件が健康に及ぼす影響が徐々に明らかになってきているということである。そしてその延長線上に psychoneuroimmunology が位置づけられる。

このように考えると、免疫系にダメージを与える HIV/AIDS に対して、行動科学的な研究が期待されるのは、ごく当然のことである。しかしながら、わが国において、この種の研究に対する理解はまだ十分に得られていない。数のうえでこそ、わが国の HIV 感染者は、他の多発国と比較して決して多い状況とはいえないが、事実として徐々にその裾野を広げ始めている。

したがって、アメリカにおけるこの種の先駆的研究成果を受け入れながら、わが国独自の研究を開始することは大いに意義あることであると考えられる。特に、わが国で最も多くの感染者を生んだ血友病に関連する行動科学からの HIV/AIDS 研究は、アメリカにおいては差別的とあってよいほど、皆無に等しい状況にあるからである。

今回訪問した2つの研究機関とも、研究成果は順次発表していくとのことであるが、筆者の訪問時点では、残念ながらもまだ十分なものはないとのことであった。これには、HIV センターの研究が前記のように6年間の、また CAPS のそれは5年間の暫定措置であるため、6年目あるいは5年目の年度末である1993年8月31日、1991年8月31日を予定研究終了日に据えている研究がほとんどであることが大きく関与しているようである。

そのため、本稿ではこれらの研究報告を踏まえてレビューすることはできず、研究機関の紹介や研究計画の紹介に終止せざるをえなかった。以上の経緯で〈研究情報〉という本欄の見出しとはほど遠い内容となってしまったことをお許し願いたい。

---